

氏名	裴 瑩
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第367号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉変容する風景 〈作品〉「輪舞曲」「光陰」「景色」「a dinner」「Holiday」「Waiting for」「残像」

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	教授	(美術学部)	東谷武美
(論文第1副査)	〃	〃	(〃)	越川倫明
(作品第1副査)	〃	准教授	(〃)	三井田盛一郎
(副査)	〃	教授	(〃)	佐藤一郎

(論文内容の要旨)

人間は動物にどのようなイメージを抱き続けてきたのであろうか。その歴史の再現はとうてい不可能であるが、断片的にでも明らかにしてみたかった。文学や伝説と同様、美術に表された動物のイメージの多くには、人間の様々な性格が反映されている。「動物」の習性からのものもあれば、人間中心の自然観、動物観に由来している。大自然のあらゆるものは、人類に創作への無限のインスピレーションをもたらす。有史以前の単調な洞窟壁画以来、動物は最も早く人類の審美的視野に入り込んできた自然の形象であり、今日の多様な芸術ジャンルにまで至る。この「動物イメージ」は人類により生命力を与えられ、各時代の観念の変化を担うことで、芸術の世界において軽視しがたい現象、独特な雰囲気をもつ景観を形成しているのである。

本論文では、芸術における「動物イメージ」の変遷とその表現の傾向について、また自分の作品に現れる「動物」が持つ意味と、作品のプロセスとの関連性を考究した。私は表面に現れる視覚的な動物の形象の強調とともに、その内在的精神に注目した。現代的な社会問題—文明と自然の間で破綻した世界の断片や、環境への影響等—を暗示し、提示するキーワードとして「動物イメージ」を扱うのである。このことが持つ意味が、現代人の自然観、生命観、価値観と反応し、美術の領域の中でどのように現れるのかについて模索すること、それが私自身の制作過程である。そして、ヒューマニズム的なエコロジカルな視点から生ずる新しい言説の中で「動物イメージ」を一つの暗示（概念）として成り立たせる。これこそが現在の制作の中で最も重要なポイントと考えている。

自分にとっての動物、その関係を模索する手がかりとして、「動物イメージ」を選択し、動物を媒介として現代社会の問題を表現することが、現在の私にとっては重要である。このとき「動物イメージ」は、ただの視覚以上であり、生き方のモラルそのものを包括するモチーフとなり、人間と自然との媒介であり、すべての発想の原点、創作の根源である。さらにはエコロジカルな平和への入口でもあり、かつ自分の制作に繋がる通路である。この「動物イメージ」の意味を伝えることが私の役割である。ここから派生する「活気」、「躍動」、「生命」、「神秘」、「自然」に関わる様々な表現を視覚化するため、「動物イメージ」の新しい言説を創るのである。すなわち単なる叙述ではなく、広範・複雑な現代美術の中で描かれる軌跡、いわば「動物イメージの変遷」の記述に本論文の最終的な意義がある。

一見して、私の描いた「動物」は、茫漠たる自然風景への私的な応答でしかないが、そこから更に一段階展開し、新たな空間や想念として生まれ変わる可能性に積極的に取り組んでいる。私の制作とは、

現代社会の中で動物を表現対象とし、同時代の自然から本来の自然の持つ性格や意味を得る一步となるであろう。

本論文の構成は、まずは前半部分で「動物イメージ」について、人間と自然と動物との関連性を示す美術作品を探る。そしてその各々における「動物イメージ」がもつ意味を考察する。次に現代美術における「動物」表現の探求から、同時代の他のアーティストの「動物イメージ」に対する解釈、制作との関連を分析する。後半部分では、自作品の中での「動物イメージ」の反映を、制作の展開と関連させ、提示、分析する。このように今後の「動物イメージ」に対する内的かつ外的な関係への再認識を試みたのである。

私のアートワークは多様なアイディアの組み合わせから成り立つ。私の作品は断面化された風景に根ざし、現実の事物と幻想的な物語や個人的な神話を結びつけたものである。その中で人間と動物の関係性などのアイディアを舞台に、物語や社会的な言説を表現し、環境、ヒューマニズム、神話などを背景にメッセージを乗せて描く。こうした科学的・客観的な描写は、世界情勢や人間の自然界の捉え方を説明する隠喩となっている。我々が世界を所有し、操っているという認識を拡大し、環境倫理における超越的視点で描くのである。

自作品について：

作品「waiting for」では、擬人化されたロバが静かに高い椅子に座り、遠くをじっと見ている様子(情景)を表現した。しばしばロバは人格化された存在として表現される。私にとって、ロバは現代的意味でのエコロジカルな平和の象徴で、重要なシンボルマークのようにになっている。ロバは、私の故郷では日常的に親しまれ、家畜であるため野生環境には順応できない。また工業化の発達につれ、彼らは次第に機械に取って代わられた。作品の中では、ロバのまなざしには憂鬱がにじみ出て、彼自身の将来に対する不安な心情を、人間である鑑賞者に伝える。この作品は、自然や万物の運命をにぎる支配者としての人間の、モラルや意識の根本を提示することを意図している。

作品「光陰」を通して、人間による有限な森林資源(自然)の過開発による、生態系の平衡の破壊や、野生動物の絶滅の危機を、現代の神話のように語る。画面の中に、動物本来の美しさ、荘厳、生命の尊厳を感じるオオカミと、人間のかたちに変身した「木の妖精」とを並置した。野生動物がにわかに悪化した境地に陥った後の、うろたえ驚く様子、そして恒久的生命への探求を表した。

作品「輪舞曲」は、2011年3月11日に起きた東日本大震災を、都市のスプロール現象により、人々や環境に挽回困難な損失・影響をもたらしたことを提示した作品である。ここでは人間と自然との大きな連鎖の中での「生命」、現代的な環境問題への提言、またこの災厄に対する心理的・感情的な応答(と震災地の現在の変貌)の、客観的な視覚化を試みた。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、筆者が自己の版画創作の中心をなす「動物のイメージ」を中心として、制作の背景をなす思考を論述したものである。筆者は銅版技法による写実性の高いモチーフを駆使して、シュルレアリスムによって開発された表現イデオロギイに依拠しながら、暗示性の高い作品を制作している。論文題名に見られる「変容」の語は、日常的な「風景」がこうした操作によって象徴的に内面の幻想世界に変換されることを示しており、そのなかで筆者にとって特別に重要なモチーフである「動物」のイメージが中心的な役割を果たしていくことになる。

第一章「動物イメージについて」では、美術における動物の形象化について、中国、西洋、ネイティブ・アメリカンの作例をあげながら叙述される。筆者は形象化の方法として再現的なアプローチと象徴的なアプローチを区別し、自身の表現が動物の姿に人間の状況や内面感情を託す象徴的なアプローチに属することを確認する。さらに、筆者の中心的な関心が現代における人間と自然との関係の急激な変化と

破壊的傾向に向けられていることが言明される。

第二章「内面世界の表現」では、自身の表現手法の基盤として、シュルレアリスムによる動物モチーフの表現の特徴がマグリット、ダリを例に叙述される。また、こうした表現にインスピレーションを得つつ、自己の作品においてどのように応用されたかが、2003～2006年の制作を例にとって語られている。この記述内容からは、筆者が表面的に過去のシュルレアリスムの表現手法を模倣したのではなく、自己の内面の深層から「操り人形」や「ロバ」といった特徴的なモチーフを選び出し、独特な不安感を感じさせる暗示的構成を作り上げていることが読み取れる。

第三章「自作品と環境問題の創り出す関係」においては、2007年以降現在にいたるまでの筆者の作品を追いながら、それらの作品のコンセプトが記述されている。ここではとりわけ、筆者の制作上の問題意識が、現代における人間と自然環境との危機的な関係に向けられていることが強調される。これらの作品に主要なモチーフとして登場するロバは、伝統的に多様な象徴的意味づけを与えられてきた動物であると同時に、矛盾に満ちた人間存在の寓意でもあり、さらには筆者自身の「自画像」的ニュアンスすら帯びている。また、最も新しい作品である「輪舞曲」は一脚の肘掛椅子の上の空虚のなかを数羽の鳥が舞う構図であるが、それが2011年3月の東日本大震災における瓦礫の風景から触発されたものであることが明らかにされている。

本論文において筆者は、動物のモチーフを中心に自身の個人的な制作の基盤と歴史を論じることによって、一見したところ直接的な意味解釈を拒絶するような作品世界の解釈の鍵を提供している。端的に言えば、簡潔で静かな構図でありながら不思議な暗示性をもつそれらの作品が、単なる教訓的動物寓話ではなく現代的な問題意識から発したものであることを示しており、それは明らかに、筆者の母国である中国の近年における急速な経済発展と自然的・社会的環境の激変に由来するものであろう。とはいえ、本論文は筆者の作品世界を単純明快に「解説」するものではない。むしろ、論文と作品は相互に補完的な関係をもって、不安と葛藤に満ちた現代的状況が実作者のイメージーションを通じて視覚的表象世界に結実する様相を物語っているということができ、その点にこそ本論文の意義が認められるだろう。

(作品審査結果の要旨)

裴瑩は、中国の魯迅美術学院で版画を学んだ後、本学版画研究室において修士課程、博士後期課程を通じ銅版画の創作と研究にあたった。中国から日本へと制作の場所を移したことが、その後の作品への方向を決める大きな要素となったと考えられる。この間、裴の作品制作の特異性を述べるなら動物を描くという主題性と技法としてのエッチング・アクアチントおよびシュルレアリスムの手法を用いた表現という制作上極めて重要な要素がほぼ全く変化していないことである。変化は作品のテーマと描画方法に現れる。中国での作品と来日間もない初期作品でのテーマは、作者の個人的な出来事に集約していた。この時期には個人的な感情の表現や家族の日本での生活という環境の変化による不安な感情などがシュルレアリスムアイデアで表現される。そして描画方法は、主観的で表現主義的なものであった。これが変化するのは、博士号審査のための作品群に現れるような環境問題にテーマに出会った事による。

人間の寓意性の象徴としてしつこく登場していた動物像は、引き続き作品中に登場するが、日本に居て知った中国での環境破壊の現状、特に揚子江カワイルカの絶滅というニュースを契機に裴のテーマは大きく変化したのであった。このテーマの変遷は同時に描画方法の変化に対応したといえる。より広い意味での社会性を獲得するため、主観的で戯画的に誇張されたイメージから対象物を忠実に描画するリアリズムへと舵を切っている。このことより作家の主観的な感情世界から、より公共的な問題意識へと鑑賞者を誘導する事に成功した。

博士号審査作品群に現れている粘り強く保ち続けられた「動物と人間という主題とエッチングおよびアクアチントの技法およびシュルレアリスムの手法」は、環境問題に対峙することになる作者によっ

て困難なテーマを強く表現できるものに変質した。他に展開してしまう事の無かった手法や技法は辛抱強く付合うしかないテーマと出会い、洗練された作品、表現へと昇華したと考える。

以上のように博士号審査作品では制作の独自性、特異性が良く理解できるとともに、作品のテーマを強く伝える技術も評価し、裴瑩の博士号取得は適当であると判断した。

(総合審査結果の要旨)

裴瑩(ペイ・イン)の論文と作品は、自己の創作の基盤をなす根源的なイメージの由来するところについて母国である中国の風土とその変容する現状と関係において、および他国で美術を研究する自己のあり方との関係において制作の背景を論述したものである。

論文「変容する風景」は、第一章動物イメージについて・第二章内面世界への表現・第三章「自作品」と「環境問題」の創り出す関係、以上十章十節からなる論文となっている。

論文では、芸術における「動物イメージ」の変遷とその表現の傾向について、また作品に現れる「動物」が持つ意味と、作品のプロセスとの関連性を考察している。表面に現れる視覚的な動物の形象の強調とともに、その内在的精神に注目し、現代的な社会問題と文明と自然の間で破綻した世界の断片や環境への影響等を暗示している。提示するキーワードとして「動物イメージ」を扱い、このことの意味が、現代人の自然観、生命観と反応し、美術領域の中でどのように現れるかについて模索することが作者自身の制作過程である。「動物イメージ」を一つの暗示(概念)として成り立たせることが創作活動の中で最も重要なポイントとして考えている。

作者自身にとっての動物との関係を模索する手がかりとして、「動物イメージ」を選択し、動物を媒介として現代社会の問題を表現することが重要であり、「動物イメージ」は、ただの視覚以上のものであり生き方のモラルそのものを包括するモチーフとして捉えている。人間と自然の媒介であって作者のすべての発想の原点、創作の根源となっている。さらにはエコロジカルな平和への入口でもある。この「動物イメージ」の意味を伝えることが創作上の役割と考えていて、ここから派生する「活気」、「躍動」、「生命」、「神秘」、「自然」に関わる様々な表現を視覚化するため、「動物イメージ」から新しい言葉を創り求めるものである。複雑な現代美術で描かれる軌跡、いわば「動物イメージの変遷」の記述に論文の最終的な意義を求めて書かれてある。

論文の構成は、前半部分で「動物イメージ」について、人間と自然と動物の関連性を示す美術作品を探り、そしてその各々における「動物イメージ」がもつ意味を考察している。次に現代芸術における「動物」表現の探求から、同時代のアーティストの「動物イメージ」に対する解釈、制作との関連を分析している。後半部分では、自作品の中での「動物イメージ」の反映を、制作の展開と関連させ、提示、分析している。「動物イメージ」に対する内的かつ外的な関係への再認識を試みている。

作品については、銅版画作品で制作されている。裴瑩(ペイ・イン)は、すでに中国で基礎的技術は修得しており、来日後東京芸術大学版画研究室に於いて修士課程二年間で更に技術、表現力を加え、博士課程三年間で十分な完成度を持って制作されたものである。

アクアチント、メゾチント、エッチング、ドライポイント等の技法を用いセピア色のインクで刷り取られた画像は美しく、人間と動物(主にロバが主役となって描かれている。)が画面の中で不思議なバランスで描かれている。作品「Waiting for」では、擬人化されたロバが描かれ、静かに高い椅子に座り、遠くをじっと見ている様子(情景)が表現されている。他の作品においてもロバは人格化されて登場する。作者にとってロバは、現代的意味でのエコロジカルな平和の象徴で、重要なシンボルマークのようになっている。作品の中では、ロバのまなざしには憂鬱がにじみ出て彼自身の将来に対する不安な必情を映し出している。作者自身の言葉によるとこの作品は、「自然や万物の運命をにぎる支配者としての人間の、モラルや意識の根本を提示することを意図としている。」と語っている。白い空間に現れるロバは

作家自身の化身となり、異国で生活する不安と人間の今を思う現代社会の不安も含め、哀しみややさしさを感じさせる画面となっている。

少しだけユーモラスな画面は魅力的で完成度の高い作品にあって大変高い評価を受けた。作家としての今後の展開を期待したい。